

広域コミュニティ紙への発展を祝して



国際教養大学理事長・学長、
才能教育研究会会長、国際社会学者

中嶋 嶺 雄

市民タイムス社が創立された1971年は、前年の「大阪万博」に象徴されるように、わが国が経済の高揚期であり、佐藤栄作政権下で沖縄も返還されて、戦後日本に一つの転機が訪れたところであった。その直後には田中角栄内閣が出現し、内には「列島改造」を、外には「日中国交」を掲げて大きく旗を振ったけれども、40年後の今日の時点で回顧すれば、日本列島のコンクリート化にもかかわらず今回の大震災には耐えられなかったし、日中関係にも数多くの問題が残されている。

そのような時期にローカルなコミュニティ・ペーパーとして創刊された「市民タイムス」は、国の政治や外交のようなハイ・ポリティクスではなく、地域に密着したロウ・ポリティクスの重要性に着眼した公正な報道に徹することによって、広く読者を獲得していった。長い間、故古川寿一氏のコラム「聞いたり見たり」や中野幹久氏のコラム「みすず野」が全国紙に優るとも劣らない文化の香りを添えていたことも特筆すべきであろう。

最近の市民タイムスが松本の本社に加えて、安曇野、塩尻さらには木曾谷へもウイングを伸ばし、広域コミュニティ紙へと大きく発展しつつあることは大変に喜ばしい。

もとより、今日のグローバル化の時代はIT（情報技術）革命の時代でもあり、パソコンや携帯電話の普及とともに紙媒体のメディアにとっては試練の時代でもある。しかし、いかにインターネットや電子図書の時代になっても、手にとって新聞や本を読むことの重要性が変わらないのは、あたかも、いかにオン・エアの授業が大学で行われても、教師と学生が対面するキャンパスライフが人格形成期には不可欠であるのと同様ではないかと、私は考えている。そのためには新聞が大いに魅力のあるものでなければならず、コミュニティの発展と活性化に貢献するものでなければならぬ。

市民タイムスの本拠のある松本市に関して言えば、市は松本を3つの「がく」ということで「岳都」「学都」「楽都」と呼んでいる。言うまでもなく山岳都市、学問都市、音楽都市のことであろう。

「岳都」に関しては、上高地や乗鞍高原、美ヶ原高原のみか穂高連峰や槍ヶ岳まで松本市になったのだから、北アルプスや麓の安曇野の魅力や松本からの北アの素晴らしい眺望を伝える紙面づくりさらにさらに力を入れてほしい。市民の多くは、常念岳の右側の山が横通岳

であることや視界のかなりを占める大滝山や鍋冠山なべかむりやまなどについてもよく知らないのではなからうか。

「学都」については、信州大学のさらなる国際化や旧制松本高校以来の教養教育の復活、地域貢献全国ランキングでトップクラスの松本大学への注目など、高等教育の発展を応援していただきたい。松本深志、県ヶ丘、蟻ヶ崎、美須々ヶ丘、松商学園などの高等学校や秀峰学園、才教学園など新しい一貫校から幼稚園・保育園までの初等中等教育の向上にも力を貸してほしい。なぜなら、全国学力テストで4年連続トップに立っている秋田県に比べて、教育立県のはずの「信濃教育」がこのところやや精彩を欠いているからである。

「楽都」に関しては、小澤征爾監督のサイトウキネン・オーケストラに大きく紙面を割いているのは大変結構である。同時に全国・全世界から毎年3000名もが夏期学校に集まるスズキ・メソードの才能教育研究会が終戦直後から今日まで、「楽都」Matsumotoを世界に発信し続けていることについても、引き続き報道していただければ幸いである。

市民タイムス40年史

1971 ~ 2011